



石原ケンジ一年ぶり二度目のステップス個展である。石原は前回の個展で発表した作品の延長と新作を展示したので、その思考の変遷を辿ることが出来る。常に新作を展示する作家も多いが、石原のような立場を保つことも見る側としては楽しみが増す。

今回、石原はキャンバス若しくは板にアクリルの作品を23点、紙に墨の作品を3点展示した。顧みれば2012年4月に石原はステップスにおける那須との二人展で、紙に墨の作品を展示していた。時間が巡ってきていることを確認することが出来る。

フリーハンドでも四次元立方体でも、石原が探求している意図に変化はない。それを、私は黒と白の転換ではないかと感じた。転換しつつも互いにあり続け、決して反転はしない。

つまり、陰と陽の関係ではなく、丁度ヴェーダ哲学で言われる「不二一元論」を想い起こすのだ。例えば一から十までを数えると、一、二...と積みあげて十になるのではなく、一が十集まって十となると考える。すると、一という個の重層化であることに気がつく。

石原の新作に、そのような感覚がある。黒と白の地に白と黒の線が乗る。画面を単に地の白黒白と感じるのではなく、かといって線に注目し黒白黒と見るのでもない。連続し、反転し、転換するのは作品ではなく、我々の視線と認識にある。

すると石原の作品は単なる美術作品の枠を食み出し、我々が日常を生きる世界から抜け出る機運を齎してくれる。現代美術と向き合う際には、美術という枠を見る者が破壊しななければならない。その基本をこの展示は教えてくれた。

